Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語を母語とする中国語学習者の語彙習得と語彙学習に影響を与える要因 ー未知語の処理と語彙学習ストラテジーー
Author(s)	小川, 典子
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77401
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（小川　典子）	
論文題名	日本語を母語とする中国語学習者の語彙習得と語彙学習に影響を与える要因 ―未知語の処理と語彙学習ストラテジー―

論文内容の要旨

一般的に中国国内の対外漢語教育においては、漢字圏の中国語学習者はその他の国の学習者よりも中国語の語彙習得においては有利であると考えられている。しかし学習者の持つ漢字知識は正の転移（positive transfer）となることもあれば、負の転移（negative transfer）となることもありえる。それでは日本語母語話者は、中国語の語彙学習において、既に持っている漢字知識をどのように活かせば良いのだろうか？漢字知識は中国語学習において逆に足かせとなるのだろうか？

これまでの中国語教育における語彙習得研究は、主に中国国内のCSL（Chinese as a second language）学習者を調査対象としていた。そのため調査対象者の母語は多様で、調査者が学習者の母語を充分に理解していないこともあり、学習者の母語背景や母語の影響については詳細には分析されていなかった。本研究では、日本語をL1とするCFL（Chinese as a foreign language）学習者が新しい語に出会った時に、どのように語彙を処理して、どのようなプロセスで習得していくのか、特にこれまでの先行研究では詳しくは調査されてこなかった、学習者の母語の影響、日本語をL1とする中国語学習者に漢字がどのように影響するのかについて分析し、より良い語彙学習のあり方について考えたい。

本研究は、全部で7章から構成されている。以下では各章の概要を述べる。

第1章「はじめに」では、本研究の背景と目的及び意義を明らかにした上で、本研究全体の構成を表す。

第2章「第二言語としての語彙習得研究概観」では、第二言語全般の語彙習得研究の中から、本研究と関連のある、語と語彙の知識、語彙習得に影響を与える要因、そして語彙学習に関する先行研究の中から付随的語彙学習、未知語の意味推測、語彙学習ストラテジーに関する研究を概観する。

第3章「中国語学習者の語彙習得研究」では、現代中国語における語の定義、特徴及び種類について述べ、語を形成する語素と語意の関係について紹介した上で、中国語学習者を対象とした語彙学習に関する先行研究をまとめ、本研究の位置づけを明らかにする。

第4章「短文の中での学習者の語彙習得」では、短文を調査材料として、学習者が未知の語に出会った際に、何を手がかりに、どのように語彙を処理してその意味を理解するのか調査を行っている。まず大阪大学の中国語専攻に在籍する1年生から4年生の学生に、短文中の語構成の異なる語の意味を問うテストに参加してもらい、次に調査対象者112名の中から成績上位者と成績下位者15名に対して回顧法を用いたフォローアップインタビューを行った。その上で、日本語を母語とするCFL学習者が未知語と出会った際に使用する手がかり「知識源」を（1）文法・統語（2）文脈（3）漢字のイメージ（4）L1語彙連想（5）L2語彙連想（6）語構成（7）L2常識（8）一般常識（9）個人の体験と9分類し、各知識源の使用頻度と有効性を分析した。また学習者が未知語の意味推測に失敗する原因についても（1）文脈理解の失敗（2）文脈を無視（3）語素の多義性（4）語素義を比喩的に利用（5）L1干渉（6）片方の語素を無視（7）両方の語素を無視（8）品詞理解の失敗（9）語構成の理解の失敗と9分類し、それぞれの原因の頻度についても統計により数値化した上で分析している。そして、出題語ごとに学習者の漢字知識の利用状況と語素義を学習者がどのように認識しているかについて分析し、学習者に影響を与える言語的要因についても考察している。

第5章「長文読解の中での学習者の語彙習得」では、テキストを用いて長文読解における学習者の付随的語彙学習について調査している。第4章でフォローアップインタビューに参加した学生の中から2年生と3年生の成績上位者10名を抽出し、語彙知識スケールVKS（Vocabulary Knowledge Scale）に基づいた語彙テストと思考発話法（think aloud）を使用して、学習者が読解活動の過程でどのように未知語を処理し、どのように付随的語彙学習が起きて語彙習得に結びつくのかを調査した。まずテスト結果から、どのような語が付随的語彙学習につながりやすいのかを分析し、次に10名の学習者のケーススタディから各学習者の読解活動における習得プロセスと習得状況について考察した。そして、学習者が読解過程で未知語の意味推測に使用したストラテジーを、（1）モニタリング（2）自問自答（3）字を書く（4）L2発話（5）繰り返し（6）内容再構築（7）検証（8）無視（保留）と8分類した上で、それぞれのストラテジ

ーの使用に対する考察も行っている。最後に、学習者の発話プロトコルから、学習者の未知語に対する認識についても考察を行っている。まず、学習者が未知語と認識しているケースについては（1）文中での適切な訳し方がわからず未知語と認識しているケース（2）意味を思い出せず未知語と認識しているケース（3）知っているはずの語が文中ではわからずに未知語と認識しているケースが考察された。次に、学習者が未知語と認識していないケースには、（1）未知語と認識できていないにも関わらず、学習者が無意識に意味を推測して偶然正しく理解できていたケース（2）未知語と認識できておらず意味も誤って理解していたケースが考察された。この他に、学習者が読解活動の過程で未知語と認識したケースもあり、これはどの学習者にも度々見られるものであった。

第6章「より良い語彙学習のために―学習者への語彙学習ストラテジー調査より―」では、学習者の語彙学習ストラテジーを調査している。まず第4章でフォローアップインタビューに参加した学生15名に対して半構造化インタビューを行い、学習者がどのような語彙学習ストラテジーを如何に使用しているのかを調査した。この調査により確認ができた語彙学習ストラテジーは、学習の段階と種類に応じて（1）未知語攻略ストラテジー（2）ノートテイキングストラテジー（3）記憶ストラテジー（4）活性化ストラテジーと大きく4分類することができた。その後、インタビュー調査から確認できたストラテジーをベースに、日本の大学の中国語学習者を対象とした30項目のストラテジー調査票を新たに作成し、インタビュー協力者と同学年に在籍する学生79名にストラテジー調査票を配布して量的調査を行った。

上記の調査の結果、学習者は「辞書で調べる」ストラテジーを高い頻度で使用していたが、その使用方法には学習者間で差異があり、語を調べた後に文脈の中に再度あてはめて、全体の内容理解に努めたり、文構造を考えると、結果として複数の知識源を利用することになり、語彙学習がより促進されて習得につながりやすい可能性が示唆された。

また、語彙学習には関与負荷（involvement load）仮説で提唱する3 つの要因「必要性」「検索」「評価」に関わる負荷が高ければ高いほど語彙学習に成功する可能性が高いことも推察されている。学習歴が長くなるにつれて、全体の学習者の「声に出して発音する」ストラテジーの使用頻度は下がる傾向にあったが、成績上位群の学習者には「読めるようになりたい」「発音が上手になりたい」という強い動機が見られ、学習歴が長くなっても「声に出して発音する」ことに関して強い執着心があった。これらのことより、優秀な学習者は語彙学習の際に自らの強い動機によってより多くの負荷に関与していることで、学習に成功していた可能性が考えられる。

また、学習歴が長くなるにしたがい、学習者は様々な方法を活用して自身で語彙を学習する術を身につけるようになっていく様子が考察され、教師に頼ったり、教師から言われるままの方法で機械的に学習することは徐々に減っていき、どの語彙が重要であるかを学習者自身が判断し、より効率的な方法を自ら考えてストラテジーを選択し使用するようになっていくことがわかった。

第7章「おわりに」では、第4章から第6章までの調査より、言語的側面と学習者の側面から考察結果をまとめている。まず留意すべき言語的要因として（1）語素の多義性（2）語意の透明性（3）母語干渉（4）漢字の字形、以上の4点を挙げている。次に学習者の観点からは（1）未知語への気づき（2）未知語の処理に使用する知識源とストラテジー（3）より良い語彙学習とは、の3点について述べている。最後に本研究の限界と今後の課題について述べ、本研究の考察結果より、学習者の語彙学習に対する指導への示唆についても言及している。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小川　典子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	古川裕
	副 査　教授	眞嶋潤子
	副 査　教授	筒井佐代
	副 査　助教	中田聡美
	副 査　特任准教授	劉頌浩

論文審査の結果の要旨

『日本語を母語とする中国語学習者の語彙習得と語彙学習に影響を与える要因－未知語の処理と語彙学習ストラテジー』と題する本論文は、従来の中国語教育研究界では学習者の母語に注目して調査を行うという発想および条件に欠けていた研究テーマについて、「日本語を母語とする中国語学習者」に考察の的を絞り、日本人中国語学習者の「語彙習得」と「語彙学習」についてデータ分析を行い、その考察と結果に基づいて、より良い語彙学習のあり方を提言しようと志した、たいへん優れた論文である。

中国語の学習に当たって日本人学習者は漢字の知識を事前に有していることで、非漢字圏の学習者よりも語彙習得においては有利であると単純に考えられがちであるが、正の転移（positive transfer）だけを強調するのみならず負の転移（negative transfer）に対しても目を向ける必要がある。また、調査者自身が学習者の母語（ここでは日本語）を理解していることも必要であるが、従来の中国語語彙習得研究ではその点も十分ではなかった。本論文は漢字知識のもたらす負の転移についても問題意識を持ち、日本語母語話者自身が行う研究として大きな価値がある。

本論文は、以下のように全7章から構成されている。

第1章「はじめに」は、研究の背景と目的及び意義を明らかにし、本研究の構成を表している。

第2章「第二言語としての語彙習得研究概観」では、第二言語語彙習得研究から本研究と関連のある、語と語彙の知識、語彙習得に影響を与える要因、そして語彙学習に関する先行研究の中から付随的語彙学習、未知語の意味推測、語彙学習ストラテジーに関する研究を概観している。

第3章「中国語学習者の語彙習得研究」では、現代中国語における語の定義、特徴及び種類について述べ、語を形成する語素と語意の関係について紹介した上で、中国語学習者を対象とした語彙学習に関する先行研究をまとめ、本研究の位置づけを明らかにしている。

第4章「短文の中での学習者の語彙習得」では、短文を調査材料として、学習者が未知語に出会った際に、何を手がかりに、どのように語彙を処理してその意味を理解するのかについて調査を行っている。調査方法は本学中国語専攻に在籍する学部1年生から4年生の学生に、短文中の語構成の異なる語の意味を問うテストに参加させ、次に調査対象者112名の中から成績上位者と成績下位者15名に対して回顧法を用いたフォローアップインタビューを行うというものである。

第5章「長文読解の中での学習者の語彙習得」では教科書を用いて長文読解における学習者の付随的語彙学習調査をしている。前章でフォローアップインタビューに参加した学生から成績上位者10名を抽出し、語彙知識スケールに基づいた語彙テストと思考発話法（think aloud）を使用して、学習者が読解活動の過程でどのように未知語を処理し、どのように付随的語彙学習が起きて語彙習得に結びつくのかを調査している。

第6章「より良い語彙学習のために」では、学習者の語彙学習ストラテジーを調査している。学生15名に対して半構造化インタビューを行い、学習者がどのような語彙学習ストラテジーを如何に

使用しているのかを調査し、インタビュー調査から確認できたストラテジーをベースにして、インタビュー協力者と同学年に在籍する学生79名にストラテジー調査票を配布して量的調査を行っている。

上記の調査の結果、学習者は「辞書で調べる」ストラテジーを高い頻度で使用していること、成績上位群の学習者には「読めるようになりたい」「発音が上手になりたい」という強い動機が見られ、「声に出して発音する」ことに関して強い執着心があり、優秀な学習者は語彙学習の際に自らの強い動機によってより多くの負荷に関与していることで、学習に成功していた可能性を指摘している。

第7章「おわりに」では、第4章から第6章までの調査により、言語的側面と学習者の側面から考察結果をまとめている。留意すべき言語的要因として（1）語素の多義性（2）語意の透明性（3）母語干渉（4）漢字の字形の4点を挙げている。学習者の観点からは（1）未知語への気づき（2）未知語の処理に使用する知識源とストラテジー（3）より良い語彙学習とは、という3点について述べている。最後に本研究の限界と今後の課題について述べている。特に、漢字語彙の意味と字形に注目するだけではなく、音声面での習得及び学習に対してより多くの注意を払うべきことは今後の研究に課された大きな課題である。

上記のように、本論文はその表題が示す通り、日本語を母語とする中国語学習者に的を絞って、その「語彙習得」と「語彙学習」について、先行研究に不足している点を指摘し、レベルの異なる112名の日本人学習者を研究対象として集めた大量のデータに対して計量的分析を行い、慎重かつ論理的に分析を行ったものである。最終試験においても審査委員から指摘された用語の定義や記述方法など、修正や訂正を必要とする箇所もいくつか残ってはいるが、本論文が中国語教育の語彙習得研究において十分に研究されずに残されてきた大きな空白地帯を埋めることにおいて、何よりも大きな学術的価値が認められる。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。